

狐とぶどう

ブラジル戯曲集



狐とぶどう——ブラジル戯曲集

一九七七年七月一日第一刷

著 者 Ⅱギリエルメ・フィゲレード

アゴステイニョ・オラーヴ

ペドロ・ブロッホ

マシャド・デ・アシス

訳 者 Ⅱ牧原 純

L・C・ヴィニョーレス

橋本綾子

発行者 Ⅱ野村 喬

発行所 Ⅱ株式会社テアトロ

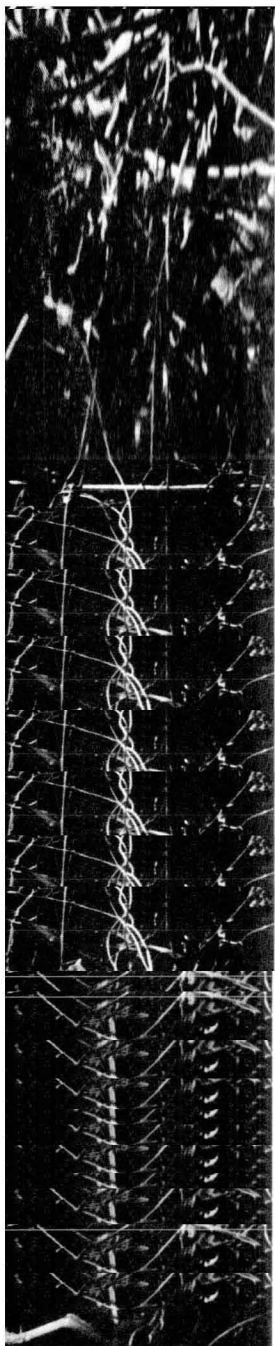
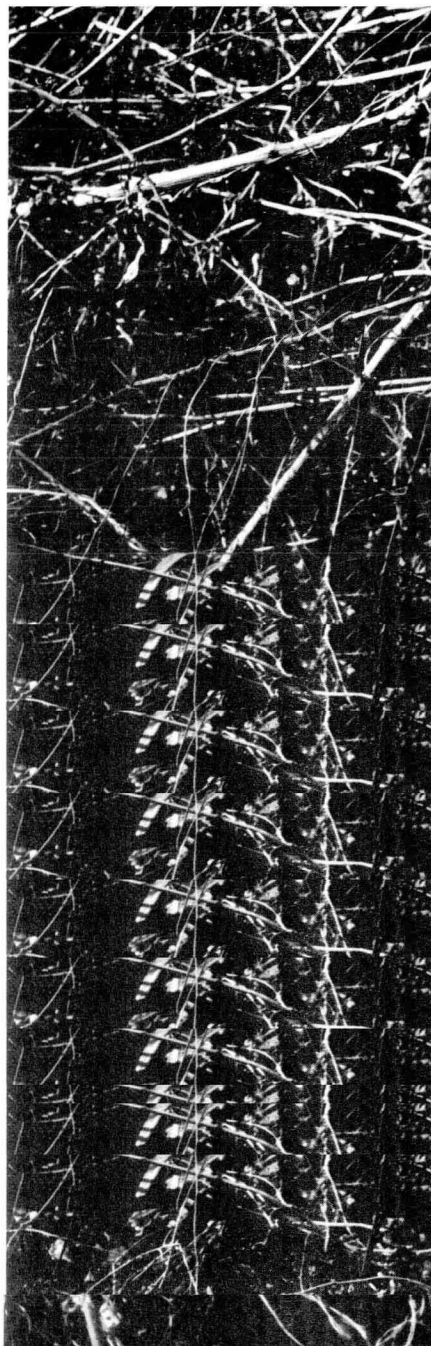
東京都千代田区猿樂町二一三一 郵便番号101

電話東京(〇三)二九四一七七九 振替東京一九九六八

印刷所 Ⅱ誠実社

狐とぶどう

ブラジル戯曲集



目次

狐とぶどう ギリエルメ・フィゲレード（牧原純訳） 5

天使 アゴステイ・ニョ・オラーヴォ（橋本綾子訳） 99

ユウリデイスの手 ペドロ・プロッホ（L・C・ヴィニョーレス／牧原純共訳） 165

議定書 マシャド・デ・アシス 227

最近のブラジル演劇界

あとがき

ギリエルメ・フィゲレード

狐とぶどう
三幕四場

登場人物（登場順）

クレイア

メリタ

クサントス

イソップ

エチオピア人

アグノストス

第一幕

サモスの町のクサントスの家。上手、下手、正面に扉。ゴング、テーブル、長椅子、腰掛が数脚とひじかけ椅子。舞台の奥、柱廊ごしに庭が見える。舞台にはクサントスの妻クレイアとその奴隷女メリタ。クレイアは髪をメリタに梳かさせている。

メリタ　ロドピスの話というのがこうなんです。クリューシッポス様が広場でお弟子たちをよび集めて、うちの旦那様に向ってこう言っただけです、「クサントスよ、君が現に所有するものは、君が失わなかったものである……」クサントス様は「その通り」とお答えになった。するとまたクリューシッポス様が続けて、「君は角を失ったことがない……」と言うので、うちの旦那様はきつぱりと、その通りって云ってやっただけです。するとクリューシッポス様がたたみかけて「君が現に所有するものは君が失わなかったものである。君は角を失ったことがない。かかるがゆえに君には角があるのである」（訳注1）

クレイア　笑う。

それでみんなお腹をかかえて大笑いしたんですって。

クレイア　面白いわ、気が利いてて。それはね、ソフィストの詭弁というのよ。（小さな間）つまりあれね。クサントスはわざわざほかの哲学者たちのもの笑いになるために広場に出か

けるのね？

メリタ いいえ、旦那様はとてもお偉い方ですもの、みんなが笑っても落着きはらって、クリューシッポス様にこういいかえしてやったんです、「クリューシッポスよ、君の妻君が不貞なるユエンは、君が角を失ったからではない。恥を失ったからである。」途端に、クリューシッポス様とクサントス様のお弟子たちがとくみ合いの大騒ぎ。

クレイア 角つき合ったわけね？

メリタはそうだというふうになづく。

だけど、ロドピスがどうしてそれを知っているの？

メリタ ちょうどそのとき広場に通り返したんです。

クレイア サモスの出来ごとは、お前たち奴隷の方がよっぽどよく知っているのね。私なんかよりは。

メリタ 奥様の自由に自由なご身分の方は家から一足も外へお出かけになりませんもの。考えてみりゃ私達よりよっぽど奴隷ってことにもなりますよね。

クレイア その通りだわ。（小さな間）お前、自由の身になりたいと思ったことはない？

メリタ いいえ、奥様、私はこのお邸で何不自由ないし、それにどこへ行ってもみんな私に一目おいてくれますもの。旦那様のような有名な方の奴隷になれたのは、ありがたいことですわ。どっかの商人が軍人さんに買われたかもしれないのに。本当に運がよかったんですわね。

クレイア それがせめてものお前の慰めなのね？

メリタ 私は鼻高々ですわ。だって奥様、旦那様はえらい哲学者ですもの。

クレイア 私は、あの人がえらい哲学者でいてくれるよりは、もっといい夫であってほしい。哲学者というものはね、形而上的観点とか宇宙の万象とか、えたいのしれない言葉ばかりためこむのが商売なのよ。

メリタ だって旦那様はたくさん言葉を発明なさったんでしょう？

クレイア いいえ、とんでもない。あの人はね、口先だけは達者だけど、実のある言葉なんか一度だって考え出したことはないわ。もうすんだの？

メリタ もう少しですわ、奥様の髪を梳かすのはほんとにいい気持。こうして手で触っていても気持がいいし、この色つやの素晴らしいこと。クサントス様はこの髪に接吻なさるんですわねえ？

クレイアは蔑むように顔をしかめる。

あたし、旦那様をみているとうっとりしてしまいますわ。

クレイア はっきり言ったらどう。私は首ったけですって。お前、きっと幸福になれるわ、もしあの人が私と別れて、お前を自由の身にしてやって……そしてお前と結婚したらね……メリタ まあ、そんなことおっしゃるもんじゃありませんわ。旦那様は奥様を愛していらっしやるんですもの。

クレイア あの人のらしい愛し方だね……私はあの人の財産の一つにすぎないのよ。お前や、ほかの奴隷たちと同じように……この邸のように……

メリタ あの方はどこかご旅行にお出かけになると、かならず奥様にお土産をもってお帰りに

なりますわ。

クレイア 夫が妻に贈物を買って帰るのはね、愛情があるしるんじゃないの、見栄なのよ……でなかったら心にやましいことがあるから。

メリタ 旦那様は有名な方ですわ。

クレイア あの人はいしょっちゅう自分の財産のことしか考えていないのよ。「人みな平等ではありえない。おのおのその分に応じて、あるものは贈物を、あるものは罰をうける」……「ギリシャの民主政治とは、つまるところ民衆がみずからの支配者を選択する権利にほかならない」……「支配者の権利とは、汝を貧者にするか、あるいは富者にするか、汝に自由を与えるか、あるいは奴隷にとどめておくかを決定することである」不公平なのが公平なことなんだとか、苦しみがつまり喜びなんだとか、この世はあの人、つまりクサントスがぜいたくな邸に住んで、上等なお酒をのんで、美しい女を抱けるようにつくられているのだとか——クサントスのそんなたわごとを、まわりの人はみんなでききほれなきやいけないわけね。(メリタの方を向いて) 終ったの？

メリタ ええ……もう少しのごしんぼう。哲学者の旦那様に、もっと美しいお姿をおみせできませんからね。

クレイア (やや軽蔑をもって) 哲学者……哲学者なんて口ばかり達者な赤ン坊よ。

メリタ 奥様は旦那様を愛していらっしやらないんですね。もし奥様があの時広場においてになつたら、クリューシッポス様のお弟子たちといっしょになって旦那様を笑いのになさつたにちがいありませんわ。ところが、旦那様の方では奥様を愛していらっしやる。旦那

様はお金持ちだし、奥様にお土産も買っちゃいますわ。

クレイア そのお土産をあの人は、まるでどこしでもするように私の前にほうりだすのよ。

(間) メリタ、あのアテネの警備隊長さんはまだ市にいらっしゃるのかしら？

メリタ (髪を梳かし終って) それでこんなにおめかしなさいますのね？ 旦那様が今日お帰りになるっていうのに。

クレイア あの人は、あそこから入って来て(と扉を指す)こういうわ、「クレイア、私のよろこび、お前にお土産をもってきてやってたよ。」でそれから、「さあ、これでよし……わしは弟子どものところに出かけてこよう。」

クサントス登場。

クサントス クレイア、私のよろこび、お前にお土産をもってきてやってたよ！

クレイア あら、お帰りになったの。(メリタに目くばせする。メリタ退場)

クサントス さ、接吻しておくれ、クレイア。

おぎなりの接吻。

さあて、今度の贈物だがね、こいつがまたいままでにない奇妙キテレツなもんだ。

クレイア テーブルの上に置いて下さらない。

クサントス それができないんだ、あんまり大きくてね。なんだと思う？

クレイア が答えようとする前にクサントスは手をたく。ひざまでとどきそうな長い袋をまとったイソップが入ってくる。

クレイア (半ばおどろき、半ばはしゃいで) なあにこれは？

クサントス 贈物さ。

クレイア これが……（イソップを眺める）これが？ これでも奴隸なの？

クサントス いかにも奴隸だ。イソップという名さ。

クレイア （声を立てて笑う）おそろしい恰好！

クサントス （得意になって）ギリシャ中とびきりいちばん醜男な奴隸さ。

クレイア よりよってこんなものをくださるなんて、からかうのもいいかげんにしていただきたいわ、クサントス！ よくもまあこんな奴隸を買ったものね。

クサントス 買ったものじゃない。

イソップ 買ったものじゃない、おまけだ。

クレイア まあ、人並みに口をきくじゃないの？

クサントス おまけなのさ、クレイア！ わかるかい！……ピレウスの港で荷かつぎ人足にエチオピア人を買ったんだ。すると奴隸商がこいつをただでくれたってわけさ。お前はこいつの値打をまだ知らないけど、いやたいした掘り出しものだよ！

クレイア こんな掘り出しもの、たった今ここからつまみ出してくださいな。

クサントス まあお待ち、クレイア……いいかい……

クレイア こんなきたならしいものにとつまみ出してよ。

イソップ ライオンをいっぺんも見たことのない狐が、あるとき、ぼったりライオンに出くわした。なにしろ生まれてはじめてのことだったので、狐は今にも息の根がとまるほどおどろいた。が、二度目にライオンに会ったとき、狐はもうそれほどおどろかなかった。三度

目に会ったときにはかなりなれっこになって、近寄っていつてライオンにはなしかけるほど大胆になった。こういうふうに、私たち人間は女らしい女の美しさに慣れてしまうように、醜さにも慣れてしまうものだ。

クサントス（驚いてボカンと口をあけたままこの話に耳を傾けていたが、クレイアをふり向いて）え、どうだね？

クレイア 面白いわ、（イソップに）お前は、自分のことをライオンだと思っているのね？

イソップ 虎と狐が、どちらが美しいかで言い争いをした。虎は自分の毛皮のあざやかな色どりを自慢した。ところが、狐は、俺の方が美しいぞ、俺の毛皮はなるほどひと色だが、智恵のはたらきは千変万化だと言った。

クサントス（有頂点になって）え、どうだね？ まったく素晴らしい奴だろう！

クレイア きつとどこかの動物園で育ったのね？

イソップ くじゃくがこうのとり羽根の色を笑っていった。「私はにしきとビロードの着物を着ているわ、あんたの羽根にもどっかにとりえがあるの？」そこでこうのとりが答えた。

「私は空までとんでのぼるわ、そしてお星さまのそばでうたをうたうわ。ところがあんたは地面を這いまわるだけじゃないの、それもちりあくたの中をさ。」

クサントス（クレイアに）どうだね？……こいつはわしの仲間ってわけだ。哲学者だよ。

イソップ どうか、私を哲学者などといわないでください。言葉をもっと大切にしましょう。

私はただ寓話^{たとえはなし}を作るだけです。

クレイア（クサントスに微笑んで、目をかがやかせながら）まあ、あなたの方がお説教されてるじ

やないの！

クサントス こいつはわしのいいなぐさみものさ。メリタにそう言って、エチオピアに自分の部屋を教えておやり。

クレイア手をたたく。メリタ登場して、イソップを一目見るなり思わず恐怖とおどろきともつかぬ叫び声をあげる。

(叱って) メリタ！

イソップ いや、お叱りになるには及ばない。私ははじめて会った人が恐怖を顔に現わすのになれていきます。あなたにもらわれたとき、私がなんと言ったか覚えておられるだろう？たとえ私なんの役にもたないとしても、子供たちをだまらせる位のたしにはなるとな。「言うことをきかないとイソップを呼ぶよ、イソップはお前たちをたべちまうよ」……

クレイア (微笑んで) 面白いわ。

イソップ そう、たしかに私は面白い人間です。しかし、人を笑わせはするが、そんなときに私の気持がどんなに真面目か、あなたがたには思いも及ばないだろう。

メリタ 何が真面目なの？

イソップ 私が醜男なのも大真面目なら、私が話すことがらも大真面目だ。笑いごとではない。それに私の智慧については誰にもわかってもらえないしな。

クサントス わしがお前を連れてくる気になったのは、お前になかなか智慧があるからさ。イソップ あなたはそれを見ぬいておいででしたか？

クレイア笑う。

メリタ それにしても醜男すぎますよね、旦那様……私がこういったからって神々がおとがめになるもんですか！

イソップ 神々はお前をお許しになるだろう。こういう話がある。ある貧乏な男が神様の像を持っていた。男は金持になりたくて一所懸命それを拝んだ。ところが神様はその祈りを一向におききとだけにならない。そこで男は、神様の像を逆さにもって、いやというほど頭を壁にたたきつけた。すると頭の中から金貨がざくざく出てきた。男はそれですっかり金持になった。神々はいつでも人間をお許しになる。そのために私たちは神々をつくるのだ。考えてもごらんなさい。もし神々がいなかったら誰が私たちを許すだろうか？

クレイア（イソップに）いまの話、とても面白いわ。どう、クサントス、誰があなたを許すだろうか？

クサントス（メリタに）扉のそとにエチオピアの黒坊がいる。そいつもやはりわしの奴隷だ。ここに呼んでおいで。

メリタ退場。

（クレイアの方を向き）ごらんとおり、こいつはなかなか智恵がある。旅の間にも再三わしを苦境から救ってくれた。そればかりじゃない、わしのために宝物まで見つけてくれたんだよ。

クレイア お前は宝物をみつけて、それをクサントスにあげてしまったの？ どうしてそんなことをしたの？

イソップ その宝がひどく重かったからです。わたしのものにすると、私がそれをかついて歩